アジアに学ぶ

三浦光男*

いまタイは，乾期の終わり．4月は1年中で一番暑い時期だそうで，朝8時から，夜7時ころまで 30°C 以上という気候が続いています．早く雨期にならないかと待ち望んでいるこのごろです．

私が，タイの首都バンコクの北約 40 km にある AIT (Asian Institute of Technology) のキャンパスに初めて立ったのは，1975 年の 8 月の終わりでした．土木学会誌でも何回か紹介されましたが，AIT はアジア諸国の発展はそのマンパワーの開発，特に工学技術者の養成にあるという理念に基づき，1959 年に創立された国際大学院大学です．その財政基盤，評議委員会，教授陣，学生がすべて多国籍であること，またゆきとどいた奨学金制度等で，ユニークな存在となっています．1975 年の 8 月から現在まで，6 人目の日本人学生としてキャンパスライフを送ってきました．この 8 か月間は，自分にとって常に新しい経験の連続であり，自分とは全く異なった，さまざまな文化的背景を持った学生たちと接触するにつけ，彼らの文化を知ると同時に，自分自身を，そして日本をより深く知ることができました．勉強の面では，日本の大学とは違う教育システムに最初かなりとまどいました．AITでは，講義にかけるウエイトというものは，日本の大学とは比較にならないくらい大きくなっています．1科目週3回の講義があり，宿題が次々と出ます（毎週毎週ちょっとした設計演習をやっているようなものです）．講義はシステマチックであり，学生の出席率は 100%，宿題の提出率も 100% でしょう．宿題は，そのつど添削されて返されます．

最終の成績は，中間試験，期末試験の成績，および宿題のできに基づいて出されます．そして，点数の悪い学生は，学期ごとのチェックで放学処分になります．以前と比べると，かなりゆるくなったといわれていますが，それでも，私のクラスで2学期までに約1割が放学となりました．こんな調子ですから，日本の大学で講義をとるつもりでやっていたのでは，卒業できるかどうかもおぼつかないことになります．

しかし，修士論文にかけるウエイトは相対的に小さく論文の予備期間として5か月，本格的に取り組むのは8か月間というのが平均的な時間配分のようです．AITでは，このような教育システムでさまざまな教育のバックグラウンドを持った学生を一定水準に引き上げることに成功しているようです．ただ，講義を重視するあまり非常によくできる学生も講義のわくの中から出ることができないというマイナス面もあるようです．

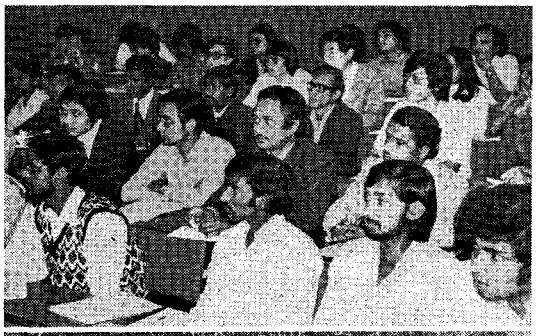
AIT での生活は，日中が暑いこともあって，日本に比べて朝がかなり早くなっています．1時間目の講義は7時45分から始まり，最終の講義は3時15分に終わります．図書館も朝7時半から夜 10 時半まで毎日開館し

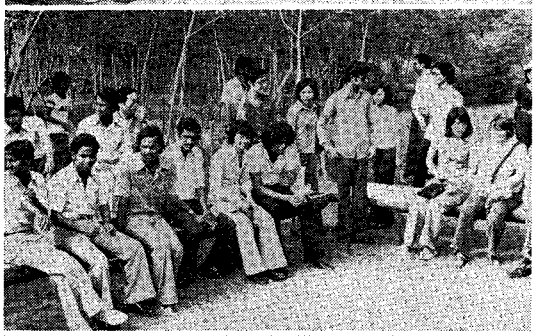
* Asian Institute of Technology (AIT) 修士課程

編集部注：1975 年3月 東工大土木工学科卒．東工大では 卒論で 土質を修めたが，AIT では水資源問題を研究中．

ています．私はいま3学期目ですが，講義2科目と実験をとっており，修士論文のほうにも手をつけはじめたところです．3時半になると教授，職員はほとんどバンコクに帰ってしまうので，その後，学生は自分なりに勉強することになります．そして，夕方になって少し涼しくなると，キャンパスのあちこちでテニス，卓球，水泳，サッカー，クリケットなどが始まります．

学生の課外活動に目を向けると，クラブのようなまとまったものはあまりないのですが，学生全体が動く仕事では，学生数が少ないにもかかわらず活発で充実しています．そして，さらに，すべての活動は否応なしに〈インターナショナル〉です．この8か月間だけでもAIT-Day（全学あげての文化祭），学科対抗のスポーツ大会，他大学との交歓スポーツ大会，各種ダンスパーティー，討論会，観光地への旅行などが学生自治会の手で行われました．特に文化祭のインターナショナルショーでは，







（上）1976年1月の新入生のオリエンテーション
（中）1975年 Student Union 企画による Ancient City 旅行のスナップ
（下）1976年1月の対抗スポーツ大会を見る学生

ベトナム，フィリピン，タイ，韓国など，それぞれの国の学生が，自分自身で，またはバンコクにいる友人を呼んで，民族衣装をまとい，舞踊を披露しました．これは他の大学の文化祭では，絶対に見ることができない見事なものでした．また，スポーツ大会をやるにしても，例えば，私の参加したバレーボールチームのメンバー構成は，中国，ベトナム，インドネシア，バングラディシュ，日本といった具合です．現在，AITにはアジアを中心に約20か国から学生が集まっており，全学生数は約250名．ほとんどが，キャンパス内の寮に住んでいるので，みな顔見知りです．この4月には，親しい友人が何人も卒業して，それぞれの国へ帰って行きましたが，別れると同時に，「日本へ帰るときは，ぜひフィリピンに寄ってくれ」とか，「台北までくれば，あとはすべて面倒見るから」と言われました．私も，彼らが日本にきたときには，できる限りのもてなしをするつもりです．

もちろん，20か国の学生が集まっていることによって起こる問題もあります．それぞれのナショナルグループに別かれ，ばらばらに行動しがちな学生をいかに一つにまとめていくかということはAIT創立以来の問題ですし，ときとして，ナショナルグループどうしの深刻な対立が起こり，はらはらさせられることもあります．私も現在，学生自治会の一委員として仕事をしていますがさまざまな習慣，価値観を持った人間が，一諸に仕事をすることの難しさを身をもって体験しています．

しかし，これらの問題も，世界がどんどん狭くなっている今日，全人類が直面しつつある問題の先取りではないかと思います．私はその中で，日本人として日本人の持っている長所を生かしつつ，勉強に，また課外活動に励んでいることを誇りに思っています．

しかし，入学してから今まで，日本人の学生が一人だけというのはいかにも残念です．日本が，AITに果たしている役割を考えたとき，日本人学生が少なくとも二，三人，常に在学していることは，非常に重要なことだと思うのです．他の国の学生も，もっともっと多くの学生が日本からくることを望んでいます．

英語力についての少々の自信と，日本とは違った環境の中で20か月の修士課程をこなすくガッツを持った学生諸君〉，AITに挑戦してみませんか．日本にいては得られない何物かが，確実に得られるはずです．さらに詳しい情報を入手されたい方はお知らせ下さい．できるかぎりの情報を提供します．連絡先は次のとおりです．

Mr. Mitsuo Miura
B-48, Asian Institute of Technology,
B-48 P.O. Box 2754.
BANGKOK, THAILAND.

（1976.5.29・受付）